

第62回 記者懇談会実施概要

1 日 時 2009年9月14日(月) 15時～17時

2 場 所 100周年記念会館 第2会議室

3 内 容

(1) 研究発表・質疑応答 (15:00～16:00)

・酒井 千絵 社会学部助教

発表テーマ「労働と移動の女性化と日本社会

—日本—アジア間の国際移動を手がかりに—

・長岡 康夫 化学生命工学部准教授

発表テーマ「遺伝子の運び屋(ベクター)の開発」

(2) 学内状況説明・情報交換 (16:00～16:45)

① 文部科学省「大学教育・学生支援推進事業大学教育推進プログラム」の採択について

資料1

② 文部科学省「教育研究高度化のための支援体制整備事業」の採択について 資料2

③ 全国社会保険労務士会連合会近畿地域協議会との協定締結について 資料3

④ 春学期卒業式、学位記授与式および秋学期入学式の挙行について 資料4

⑤ 河田恵昭環境都市工学部教授の平成21年度防災功労者内閣総理大臣表彰受賞について

資料5

⑥ リクルート社「高校生に聞いた大学ブランドランキング2009」およびゴメス社「大学サイトランキング」の結果について 資料6

⑦ 関大生の活躍について 資料7

(3) 河田悌一学長 挨拶 (16:45～17:00)

4 大学側出席者

河田悌一学長、芝井敬司副学長、越智光一副学長、良永康平学長補佐、

酒井千絵社会学部助教、長岡康夫化学生命工学部准教授、

三浦真琴教育推進部教授、須長一幸教育推進部助教、

五藤勝三学生サービス事務局長、稲田一豊学事局次長、奈須秀治GP支援課課長補佐、

川原哲夫学長室次長(学長担当)、横山博行広報室次長、木田勝也広報課長 他

5 参考資料

(1) ニュースレター「Reed」 No. 18

(2) 地域アカデミー2009 シラバス

(3) 文化フォーラム「日本の美とこころ」 チラシ

(4) 経済・政治研究所 第186回公開講座 チラシ

(5) 経済・政治研究所 第182回産業セミナー チラシ

労働と移動の女性化と日本社会

——日本—アジア間の国際移動を手がかりに——

社会学部 助教 酒井 千絵

【概要】

本報告では、現代日本における海外移住の事例から、特に1990年代以降、女性による自発的な移住が増加したことに注目して、日本社会の雇用関係と経済のグローバル化の関連を考察する。

生まれた国を離れて生活する人は現在世界に2億人を数え、日本でも外国籍住民が200万人以上、海外在留邦人が100万人を突破するなど、国際移動は活発化している。日本は比較的均質な社会と見なされ、日本国内の外国人に対する排外主義や偏見が強まる反面、日本人の海外滞在は「自己実現」など個人的な行為と見なされてきた。だが日本人の国際移動についても、産業のグローバルな再編にともなう雇用や労働の変容がその重要な要因であるような「移住」として理解する必要がある。

日本では1980年代後半から生産のグローバル化が本格化し、改革開放経済を進めてきた中国に多くの日系企業が生産拠点を移した。そのため、日系企業が地元社会あるいは諸外国の取引先企業、労働者、消費者、官公庁等と交渉する際に必要な情報や文化を仲介するサービス産業が重要な役割を担うようになる。拡大したサービス産業では、それまで基幹産業が海外に男性中核社員を派遣する際に適用してきた福利厚生や長期雇用を保障する雇用ではなく、女性や若者を現地採用待遇で雇用するようになった。他方、不況の影響で日本国内でも雇用が不安定化し、高度経済成長期以降、社会保障や税制のモデルとなってきた男性片働き家族が減少するとともに、もともと周縁的な労働者であった女性の雇用はますます非正規化していった。そのため、女性の中には日本国内で働き続けることに不安を感じて、これまでに身につけてきた外国語などを利用し、「国際的」な職業キャリアによって状況を打開しようと試みて、中国やアジアなど、就労可能なビザが取得しやすい地域に移住する者が増えていった。

サービス産業で現地採用として働く日本人女性たちは、「日本」と「海外」が文化や職場慣行等において異なっているという前提のもとに、双方を理解し、仲介しうる能力を強調して、実際に仕事内容や職階を上昇させている。たとえば、職場内で男性派遣駐在員が代表する「日本的」な働き方を現地社員に伝え、両者の衝突を回避したり、現地の製造業者と日系の製造業や商社間で、製品の遅れや欠陥をカバーしたり、日系企業の要求を解釈して伝達したり、といった役割を女性現地採用者や起業経営者が担っている。彼女たちの役割は、日系企業のグローバル化において欠かせないものとなっている。

こうした傾向は、海外日系企業のローカライズが進むなかで強められ、女性のみならず、中国に留学する若い男性や、日本で製造業などに勤務してきた中高年男性などに拡大している。つまり、日本の労働市場で周縁的な位置にある女性の戦略は、雇用のフレキシブル化に対する先駆的なモデルとなりえたのである。同時に、報告者は現在、グローバル化の局面に限らず、たとえば介護や子育て支援などが外部化され、新たなサービス産業が登場する中で、女性たちが自らの労働を意味づけ、差異化する過程を考察しているが、両者に共通する側面を見いだすことができると考え、研究を進めている。

【プロフィール】

1972年神奈川県生まれ。関西大学社会学部助教。専門は、人と文化の国際移動、地域子育て支援組織の形成など。東京大学文学部（社会学専攻）卒業、東京大学大学院総合文化研究科博士課程（国際社会科学）修了。博士（学術）。（財）ひょうご震災記念21世紀研究機構主任研究員を経て、2009年4月より現職。主な論文に「ナショナル・バウンダリーにおける交渉：香港で働く日本人の語りから」（『社会学評論』vol.51, no.3）、「香港における日本人女性の自発的な長期滞在」（岩崎信彦ほか編『海外における日本人、日本のなかの外国人』所収）、「中国へ向かう日本人：「ブーム」に終わらないアジア就職ブームの現在」（『アジア遊学』所収）。人びとが与えられた社会的役割を活用しながら、職業やライフスタイルを選択していく過程に関心がある。趣味は映画鑑賞と旅行。

遺伝子の運び屋（ベクター）の開発

関西大学准教授 長岡康夫

動物細胞内に外から遺伝子を入れて、その遺伝子その細胞内で発現させる技術は、今や分子生物学の研究領域では、不可欠な基本技術の一つとなっています。例えば、最近話題になっている iPS 細胞の作製や、遺伝子治療などにもこの技術が使われています。外部の遺伝子を細胞の中ではたらかせるためには、細胞膜を通過させて、さらに核の中まで効率よく運ぶ必要があります。この遺伝子の輸送のために使われる運び屋を「ベクター」とよびます。従来、このベクターとしてウイルスが用いられてきました。ウイルスは本来、細胞内に自分の遺伝子を運び入れて、それを働かせることができるので、その機能を利用しているわけです。ウイルスは効率の良いベクターなのですが、ヒトへの利用などを考えるとその安全性に問題があります。そこで現在、安全な非ウイルスベクターの開発が盛んに進められています。ところが、非ウイルスベクターは一般に、ウイルスベクターに比べると導入した遺伝子の発現効率が悪いという欠点があります。

そこで、私は、ヒストン脱アセチル化酵素（HDAC）阻害剤と既存のカチオン性ナノ粒子とを結びつけた非ウイルス性高性能ベクターを開発しました。HDAC 阻害剤は遺伝子をスムーズに核まで送達し、核内での遺伝子発現を上昇させます。これにより、既存の非ウイルスベクターの約 4 倍から 10 倍の遺伝子発現効率を示す新規ベクターの開発に成功しました。

*本研究の成果は *European Journal of Medicinal Chemistry* 電子版（2009 年 8 月）に発表されています。

プロフィール

1965 年 神奈川県生まれ。関西大学化学生命工学部准教授。博士（薬学）、薬剤師、健康食品管理士。専門は医薬品工学。京都大学薬学研究科博士前期課程修了後、京都大学薬学研究科助手を経て 2001 年から現職。その間 2005 年 4 月から 1 年間、オックスフォード大学生理学研究科および化学研究所で在外研究。医薬品開発を志向した生体機能分子の探索と生理機能メカニズムの解明を目的に研究を進めている。